

初等音楽科教育法

音楽教育講座・田邊 隆

1. 授業の概要

この科目は「指導法に関する科目」区分にあたる。今年度は昨年と異なる専修クラスを担当したこともあり、昨年のデータとの比較を通して授業を振り返る。昨年度は（音楽・保体・英語・聴言・発達）クラスであるのに対して、今年度は（教育・心理・幼年・国語）クラスである。

授業形態

担当教員による講義が 5 回、学生の模擬授業が 8 回、特別講師による授業が 1 回、最後に全体の省察を 1 回行った。また模擬授業では、「模擬授業（50 分）+ 質疑応答（30 分）+ 担当教員によるコメント（10 分）」で計画したが、回を重ねるほど、質疑応答が白熱し、担当教員のコメント時間が 5 分という授業も珍しくなかった。この点について学生のアンケート結果に表れているので後述する。

なお、15 回目の省察では、8 回の模擬授業を全て録画したが、その録画を 80 分に再編集したものを中心に省察を進めた。今回の手法は初めての試みである。この編集版を作成した意図は、模擬授業に対する担当教員のコメント時間の少なさを補足する点と、個々の模擬授業をばらばらに捉えるのではなく、音楽学習の基礎的事項などを共通事項として捉え、半期全体の授業を総括する点にある。今学期の反省として、各模擬授業の各場面に、テロップを挿入する形で、学生ヘフィードバックを行うと共に、このディスクについては希望学生に対し DVD のダビング提供を行った。

模擬授業の題材と内容

題材は、基礎領域で「リズム遊び」、身体表現領域で「世界の祭り」、歌唱領域で「音の重なり（合唱）」、器楽領域で「トーンチャイム」「日本の太鼓」、創作領域で「音の組み合わせ」、鑑賞領域で「世界の音楽」「様々な表現（動物の謝肉祭）」の 8 件を行った。

各領域の概要は、（基礎領域）「リズム遊び」で、身近な素材を生かした楽器で表現し、

様々なリズムの組み合わせを学習した。（身体表現領域）「世界の祭り」では、音楽の感知とともにサンバを踊る体験を通じた学習を行った。（歌唱領域）「音の重なり」では、2 部合唱を作り上げる活動を通して、発声と歌と伴奏、2 声部の調和を学習した。（器楽領域）「トーンチャイム」では、奏法とアンサンブルの基本について、「日本の太鼓」では、基本奏法と間について学習した。（創作領域）「音の組み合わせ」では、様々な楽器を用いてイメージを具体化する学習を行った。（鑑賞領域）「世界の音楽」では、各地の民族音楽の特徴について、「様々な表現」では、楽曲による題材設定の形で「動物の謝肉祭」を題材として、なぜそう感じるのかについて根拠を示す学習を行った。

学習指導要領における目標や内容との関連では、下記の内容を含む模擬授業であった。「楽しく音楽に関わり、基礎的な表現の能力」「様々な音楽に親しむ」「曲想にふさわしい表現」「音色の工夫」「副次的な旋律」「音楽の仕組み」「楽曲の構造」「音楽を形づくっている要素」「音の重なり」「曲想とその変化」「呼吸および発音の工夫」「様々な発想をもった即興的な表現」などである。

2. 昨年度との比較

履修状況

昨年度の履修登録数は 50 名、今年度は 51 名で、ともに全体の出席率は 94 % で同じ数値となった。

アンケートの結果

H21=(音楽・保体・英語・聴言・発達) / H22=(教育・心理・幼年・国語)

a) 教職に就く意志 (=強い希望 ~ =希望しない)						
相関 r=	尺度					
0.97	H 21	45 %	30	9	9	7
	H 22	37 %	29	14	14	6

b) 音楽授業への関心 (=強い関心 ~ =関心無い)						
相関 r=	尺度					
0.90	H 21	34 %	41	18	7	0
	H 22	26 %	63	8	4	0

c) 講義の難易度 (=極めて難解 ~ =極めて平易)						
相関 r=	尺度					
0.99	H 21	0 %	7	91	2	0
	H 22	2 %	6	90	2	0

d) 教員の講義時間 (=多く希望 ~ =少なく希望)						
相関 r=	尺度					
0.97	H 21	0 %	27	73	0	0
	H 22	4 %	14	80	2	0

e) 模擬授業の回数 (=多く希望 ~ =少なく希望)						
相関 r=	尺度					
0.99	H 21	0 %	2	86	10	2
	H 22	0 %	4	94	2	0

f) 授業後の意見交換時間 (=多く希望 ~ =少なく)						
相関 r=	尺度					
0.98	H 21	5 %	11	82	2	0
	H 22	0 %	18	74	8	0

g) 模擬授業の持ち時間 (=多く希望 ~ =少なく)						
相関 r=	尺度					
0.99	H 21	0 %	2	98	0	0
	H 22	0 %	2	96	2	0

h) 教員のコメント時間 (=多く希望 ~ =少なく)						
相関 r=	尺度					
	H 22	27 %	47	26	0	0

昨年と今年度で、専修が異なるが、分布状況の相関係数からも判るように、ほぼ同じ分布になっている。また今年度は、h)項目を入れたが、学生同士の質疑応答が白熱したことにより、担当教員のコメントの時間が制限されたことに対するマイナス評価がアンケート結果に如実に表れている。

また、質問項目間の相関を求めたが、特筆する相関は、見られなかった。

全体										
有意確率(強調表示) p < .05000										
N=49 (欠測値は、ケース/列 削除)										
変数	教職意識	現場関心	難易度	教員講時	模擬授業	意見交換	模擬時間	教員コメント		
教職意識	1.00	.30	.12	-.11	.28	.20	-.16	.02		
現場関心	.30	1.00	.03	-.03	.24	.02	-.00	.04		
難易度	.12	.03	1.00	.31	.40	-.04	.26	-.28		
教員講時	-.11	-.03	.31	1.00	-.03	-.30	-.19	.00		
模擬授業	.28	.24	.40	-.03	1.00	.15	-.41	-.11		
意見交換	.20	.02	-.04	-.30	.15	1.00	-.00	-.17		
模擬時間	.16	-.00	.26	-.19	.41	-.00	1.00	-.14		
教員コメント	.02	.04	-.28	.00	-.11	-.17	-.14	1.00		

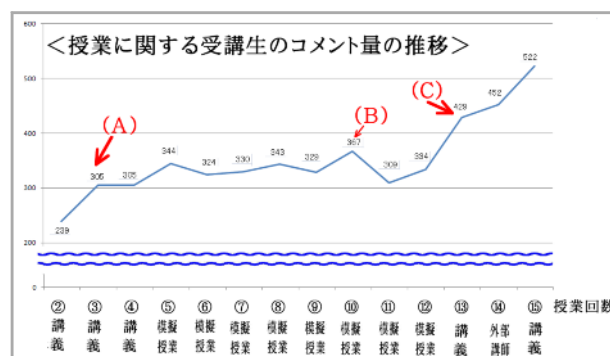
今後に向けて、時間配分をより厳密にする必要がある。

3. 授業後の反応

出席カードに自由記述で、コメントを書く欄を設けている。この欄への記述をいっさい

強制していない。それは授業後の反応(少しでも履修生の本音)を推し量る意図からであるが、下のグラフの様に、授業への慣れも加わり、授業者と履修生、また履修生同士の人間関係が形成されるにつれ、自主的に記述する量が増えていることが判る。第1回目はガイダンスであるため、出欠を取っていない。2回目以降の推移を示したグラフである。

グラフが上下に変化する点(A)~(C)は、それぞれで理由が異なる。まず(A)点は、「The sound of Music」の中で、音楽学習の場面展開を具体的に提示した授業であり、第2回目の理論的内容に比べ、より具体的な例示を多様した授業展開が理由と考える。また(B)は従来の授業に比べ、周到的な準備を行った模擬授業であったため、学生のコメント内容を加味すると、学生の授業に感服したという要因が考えられる。(C)は模擬授業が終わり、久しぶりの講義で、受講生の身近な木村カエラの「Butterfly」を例示したことによる。



4. 今後の課題

音楽授業づくりを中心にこの授業を行ったが、音楽の基礎的な事項と音楽実技の力量に個人差があり、音楽面の能力差が授業づくりで極めて大きな影響を与えている。この点の解決策として、「初等教科音楽」での基礎力の養成が不可欠であると考えられる。また、「初等教科音楽」の履修期間のみ、ピアノ練習場を活用するのではなく、大学4年間で、継続できる方策も求められている。

今年は実験的に、外部講師を招聘して1枠授業を行ったが、学生への影響が大きく、教育実習前のこの時期には、適時であるとの印象を強く持った。

また、小テストの導入による継続した評価システムの検討も必要であると考えられる。